

和歌山県立博物館評価(令和5年度事業評価用)

<p>博物館長による所見</p>	<p>令和5年度は、2本の特別展との5本の企画展が行われた。特別展「きのくにの小浪華—湯浅ゆかりの文人の書画」は、湯浅町教育委員会との共同調査の成果をもとに、当地における豊かな文芸活動のさまを示した。漢詩等の展示が多くやや難解な点で改善点は残ったが意義深い展示であった。特別展「紀州・明恵上人伝」は、生誕850年を迎えた明恵の、故郷における動静を主眼に関連の文化財を紹介したもので、従来の明恵に関する展観ではほとんど顧みられなかった、紀州における明恵像を明らかにし注目を集めた。5本の企画展もその内容において学芸員の力量がよく発揮できたものであった。入館者数はコロナ禍前の水準には戻っていないが徐々に回復傾向にある。今後も調査・研究の成果を反映しつつ、入館者にわかりやすい展示に努めたい。新たに1名の学芸員が採用となった。円滑な学芸業務の継承がなされるよう、館内研修等の実施も視野に入れたい。普及・教育・広報といったアウトリーチの強化には、当該分野の能力を有する専門職員の配置が望ましく、歴史分野を領域とする学芸員とともに増員を要求したい。「お身代わり仏像」の事業は、計画通り実施されているが、それに伴い仏像を収蔵するスペースの確保が必要である。また当該仏像は収蔵するだけでなく定期的に展示・活用することも不可欠と思われる。令和8年度までに実施予定の空調機改修に向けて、常設展示の構成や内容を十分に検討し、レプリカや展示パネルの更新など、実施計画に基づき早急に具体化する必要がある。</p>
<p>評価部会による所見</p>	<p>令和5年度春特別展「きのくにの小浪華—湯浅ゆかりの文人の書画—」、秋特別展「紀州・明恵上人伝」は、ともに地域に根付いた展覧会として、当該地域における入館者数、教育普及的な成果をあげ、博物館の戦略的な意図がある程度達成されたものとして評価したい。一方で、特別展・企画展・常設展を効果的に運用しながら、和歌山の魅力を発信できるような各展示の構築を検討されたい。特に常設展のリニューアルについては、県外からの利用も視野に入れた内容の精査を希望する。また入館者数については、目標値であるコロナ禍以前の水準(年間35,000人)までには到達していないものの、コロナ禍前の状況の80%まで回復傾向にあることは、日々の努力の積み重ねと評価したい。日常的なレファレンス対応や、地域に根付いた展覧会活動など、県立博物館が和歌山県になくてはならない施設であると評価したい。課題としては、来館者・利用者のテーマニーズをさらに拾い上げるための地域戦略をさらに検討されたい。県外からの博物館の来館者をさらに増やすための工夫について検討されたい。新規に学芸員1名を採用できたことは評価する。博物館の機能・役割をさらに充実させるためにも、学芸員の増員のほか、学芸員のスキルアップのための研修機会の増加、教育普及担当者の確保などを検討されたい。また博物館に求められる機能や役割を認識しつつ、長期的な視点にたって、デジタルコンテンツの充実や収蔵スペースの確保、免震装置設備など博物館設備の充実を図るように検討を進められたい。</p>

令和5年度 和歌山県立博物館評価様式

1. 資料収集・管理

博物館長による所見	資料の収集は、博物館における展示のみならず研究の質的向上に不可欠であり、優良な資料の入手のため、引き続き購入予算の増額を求めたい。収蔵品のデジタルデータ化は順調に進んでおり、今後も計画的に推進するとともに、運用がより円滑・効率的になるよう点検・改善も臨機に行いたい。収蔵スペースの確保は、資料・資材の移動を行ったことでやや改善したが、なお十分とはいえない。また大規模災害時の被災文化財の収容も考慮すべきである。防虫・防菌・防黴の処置は適切に行われ、収蔵資料の他館への貸し出しも効率的に対応できている。
評価部会による所見	博物館資料の購入について、恒常的な資料収集活動は重要であり、継続的な予算の確保に努めるべきである。「和歌山ミュージアムコレクション」(デジタルコンテンツ)については、画像は順次公開されており評価できる。一方で、利用に制限がある点は改善の余地があり課題が残る。収蔵品は今後とも増加していくことが見込まれるため、収蔵品の受け入れ基準を明確化する必要がある。あわせて収蔵品の利活用状況なども精査し、収蔵・管理状況について中長期的な計画を立てるべきである。

①資料収集

(1)適正な資料・図書の収集とその数量の把握

令和5年度目標	「和歌山博物館施設デジタル化計画事業」(2年目)のなかで、収蔵品管理データベース(I.B.MUSEUM)に写真画像・調書データを追補する。高精細画像の撮影を20件実施し、データに搭載する。
自己評価	「和歌山博物館施設デジタル化計画事業」(2年目)として、収蔵品管理データベース(I.B.MUSEUM)へ完全に移行し、運用を始めた。高精細画像の撮影を9件実施し(R4は7件)、データに搭載した。購入や寄贈・寄託などにより新たに収蔵品になった資料のデータは追記したが、既存の収蔵資料の画像については追記できなかった。
課題・改善案	収蔵品管理データベース(I.B.MUSEUM)に既存の収蔵資料の画像を追補する必要がある。また収蔵品管理データベース(I.B.MUSEUM)をより運用しやすいように問題点を洗い出し、改善を図っていくことも課題である。

②資料保存

(2)資料の保存環境管理、点検調査、資料の修復

令和5年度目標	棚増設の予算化に向けての検討を行う。掃除については、担当者が毎月実施するように努める。収蔵品のコンディション・チェックを徹底し、あわせて利活用状況の確認を行う。
自己評価	収蔵庫の棚増設の見積もりをし、予算化に向けて協議を進めたが、予算化には至っていない。収蔵庫の掃除については、月番を中心に毎月1回以上実施することができた(年間16回)。収蔵資料の新規の館外貸出についてはデータベースに記録したが、コンディション状況の入力はできなかった。
課題・改善案	収蔵スペースの確保については協議を進める。また収蔵品管理データベース(I.B.MUSEUM)に、これまでの利活用状況およびコンディション状況についてデータを追記していく必要がある。

③資料管理

(3)資料の管理方法、全体の数量の把握

令和5年度目標	寄託資料の更新にあたり、寄託品全点の収蔵状況の確認を実施する。
自己評価	現在、館蔵品1,202件26,018点、寄託品2,675件16,822点(預り証書発行件数2914件)。寄託資料の更新にあたり、寄託品全点の収蔵状況の確認をし、新たな預り証書の発行をおこなった。あわせて、収蔵品の一部を移動するなど、収納棚に空間をつくり、収蔵できるスペースの確保をおこなった。
課題・改善案	収蔵スペースの確保および、収蔵率の把握(数値化)、また予算化には至っていない。

④資料の活用

(4)他機関への貸出、資料の情報公開

令和5年度目標	貸出基準の明文化を行う。画像利用申請の手続きについては、収蔵品のデジタル公開とあわせて申請手続き(許諾)不要とできるようなかたちを検討する。高精細画像の撮影(20件)をしつつ、公開用の画像データを増やす。博物館のホームページ内に収蔵品検索の項目を設ける。
自己評価	館外への資料貸出の内規を作成した。画像利用申請手続きについては申請手続き不要とはできていないが、公印省略とあわせて電子メールで許可書を発送するなど、さらなる簡略化を図った。高精細画像の撮影を9件実施し、画像を和歌山ミュージアムコレクションに搭載した。収蔵品検索については、収蔵品検索項目を設けるとともに、使用感等を踏まえつつ、持続性を優先した改修方針の検討をおこなった。
課題・改善案	和歌山ミュージアムコレクションの画像ダウンロード機能を整備し、館蔵品については申請手続きの簡略化をさらに進める。またホームページの改善は、問題点の洗い出しとあわせて進める必要がある。

2. 調査・研究

博物館長による所見	調査研究に伴う各種のデータは、今後の企画展や新たな研究の基盤になるものであり、有効に活用されるためにも共有化ルールの作成が急務である。調査研究の成果は内部の図録・紀要のみならず、外部の学術誌、口頭発表等で公に還元されている。今後は外部調査員や補助員の採用も可能にし、分析化学・保存科学分野での大学等との連携や協同研究も視野に入れ、多様なデータ取得の機会を増やす必要がある。
評価部会による所見	学芸員の調査研究活動とその公開については、多方面で積極的に進められており、高く評価できる。これからも継続的に調査研究を進め、様々なかたちで成果を発信していくべきである。同時に、県立博物館が外部研究機関の受入機能を果たしている点についても評価したい。今後は、保存科学など、これまで交流の少なかった機関との共同研究についても新たに摸索・検討されたい。また調査成果のデータ整理と利活用のルール化は、昨年度以来課題が解決されておらず、早急に行うべきである。

①調査研究活動

(5)適正な調査研究、調査研究データの整理、共同研究の実績

令和5年度目標	データ蓄積のルール化について明確化する。他機関との連携・共同研究については、前年と同程度(6件)参加し、企画展やイベントなどを通じてその成果を公開する。
自己評価	展覧会や事業ごとに仕分け(フォルダ分け)をしているが、データ名・ファイル名など、共有化するためのルール(基準)の明確化はできていない。他機関との連携・共同研究については5件参加し、それぞれに成果を公開した。
課題・改善案	展覧会や調査画像のデータ蓄積と整理について、ルールを明確化する。

②研究成果の活用

(6)展示・教育普及活動等への反映、学術的公表

令和5年度目標	令和4年度と同様に、研究成果の公表に努めるとともに、外部での公表の機会は積極的に活用して研究活動の社会還元を図る。
自己評価	展覧会・研究紀要・講演会などでの研究成果の公表は従前通り実施した。市民向け講演会・シンポジウム(15件、館内での学芸員講座含む)、学会での報告(6件)、紀要等での論文公表(6件)を通じて研究成果を発信した。また科学研究費の取得の成果を企画展として実施し図録を刊行した(1件)。
課題・改善案	令和5年度と同様に、研究活動成果の公表に努めるとともに、紀要・学術雑誌、展覧会、講演会・学会報告など外部での公表の機会は積極的に活用して研究成果の発信、社会還元を図る。

3. 展示

博物館長による所見	開催した特別展（2本）・企画展（7本）はいずれも個性的で内容も充実しており、今後もこの水準を維持・継続させたいが、一部のアンケートなどで難解さを指摘された点は、今後に向けて可能な限り改善を検討すべきであろう。今後の企画展の実施計画・内容についても具体化を検討を急ぎたい。常設展については、エントランスや2階の情報コーナーのあり方も含め、引き続き改修案策定に向けて内容を詰める必要がある。
評価部会による所見	展覧会は特別展・企画展いずれも、博物館の調査研究活動に立脚し、和歌山という地域に根付いた充実した内容で、高く評価したい。今後も水準を落とさないように継続していくべきである。入館者数は目標（35,000人）に達していないが、コロナ禍前の80%程度までに回復していることについてはその努力を評価をしたい。県内のみならず県外からの来館者も意識し、常設展の内容についてはさらなる工夫を検討されたい。アンケートの回収率も上昇し、多様なニーズを把握することができた点は評価できる。今後はアンケート回収率をさらに上げ、利用者のニーズをすくい上げるための工夫の検討を希望する。

① 常設展

(7) 展示の更新、計画的な保守・管理

令和5年度目標	常設展の内容の更新(リニューアル)について、博物館協議会・利用者などの意見を参考にしながら、速やかに案を策定する。
自己評価	常設展のリニューアル案については、博物館協議会に提案をおこない意見を聴取し、検討を進めた。県教育委員会との協議も進めたが、予算化・方向性を決めるまでには至らなかった。
課題・改善案	中期的な改善案と長期的な改善案を考えたうえで、博物館協議会や利用者などの意見を参考としつつ、改修案を早急に策定し、県教育委員会との協議を続ける。

② 特別展・企画展

(8) コンセプト・構成・展示手法、成果物、来館者・展示資料の安全

令和5年度目標	令和6年度・令和7年度の特別展について、令和5年度中の博物館協議会に諮る。また、県下の文化力の底上げ及び将来の愛好者の育成を図るために、地域に根付いた博物館の在り方を念頭に、展覧会を計画する。コロナ禍以前の頻度や形態で、各種イベントを実施できるようにする。
自己評価	令和5年度の特別展として、春には「きのくにの小浪華—湯浅ゆかりの文人の書画—」、秋には「紀州・明恵上人伝」を開催した。入館者は目標とするコロナ禍前の35000人には到達しなかったが、約80%まで回復した。内容的には、ともに地域に根ざした展覧会として、有田地域の歴史と文化をあらためて見直す機会となり、当該地域からの入館者は多く、概ね目的を達成できた。また有田郡域の市・町の教育委員会の協力も得たこともあり、学校などの若年層に対しても郷土の歴史と文化を育む良い機会となり、教育的な効果も大きいものがあった。 また令和6年度・7年度の特別展の内容について、地域に根付いた博物館の展覧会として、春特別展「紀州東照宮の宝刀」ならびに世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年記念特別展として長期にわたる展覧会「聖地巡礼—熊野と高野—」を計画し、協議会に諮ることができた。そのほか、コロナ禍以前の形態・頻度で講演会・ミュージアムトーク、現地見学会などを実施した。
課題・改善案	令和7年度の春・秋の特別展案について、令和6年度1回目の協議会に諮る。

③ 館内小展示・出前展示

(9) 実績とコンセプト

令和5年度目標	資料の保全に留意しながら、タイムリーな内容のものを3件程度企画・開催する。
自己評価	1階エントランスにおいて、ロビー展「さわって学ぶわかやまの歴史—さわられるレプリカとさわって読む図録—」、またエントランスホールを提供し岡山幼稚園による展示をおこなった。夏に2階文化財情報コーナーにおいて、博物館実習生による展示「絵図で巡ろう！和歌浦—観光地としての発展—」を実施した。
課題・改善案	スポット的な展示は目標とする回数には至らず、2階およびエントランスの有効活用を考える必要がある。

④入館者の傾向
(10)アンケートの分析

令和5年度目標	アンケートの回収率をあげるとともに、集計情報の分析を行い、展示内容やタイトルについて、若年者に訴求する斬新な視点を盛り込めるように検討する。
自己評価	アンケート回収率は昨年度より1%上昇し約9%となり、多くのニーズを把握することができた。またアンケート内容をフィードバックするため、各展覧会終了後に学芸課内で反省会を実施し、課題の共有化を図ることを始めた。令和6年度はこれまでと異なる形態の特別展「聖地巡礼―熊野と高野―」を計画することができた。
課題・改善案	案内方法や周知方法、回収場所などの再検討をし、アンケートの回収率をさらにあげる。あわせてアンケートの分析を進め、フィードバックをするための仕組みを構築し定着させる。

4. 教育普及

博物館長による所見	学校を対象とした利用は前年度とほぼ同程度で推移したが、今後もさらに利用促進のための方策を強化すべきで、教育・普及・広報担当職員の配置を求めたい。講演会・講座等の実施はコロナ禍以前の状況に復したが、今後はミュージアム・トークやワークショップなど双方向型のイベントも実施したい。外部ボランティア導入は、幅広い意見を得るためにも有効であり、実施を視野に課題を整理する必要がある。
評価部会による所見	学校利用は例年並みの利活用が維持された点は評価できる。また教育委員会と連携して、学校を対象とした利用促進の取り組みを行った点についても評価したい。さらなる利用促進のための周知方法、利用する学校側の状況やニーズなどの把握を検討されたい。また、小中学校に比べ、高校・大学による団体利用が少ないため、広報手段を検討されたい。広報のためにも、また団体利用の対応のためにも、教育・普及・広報担当職員の配置と積極策が必要ではないかと考えられる。多くのレファレンスを丁寧に対応していることは学芸専門知見の普及の点から高く評価できる。引き続き博物館の重要な使命として取り組まれない。

①学校・団体の利用

(11)学校・団体の利用実績と広報活動

令和5年度目標	県教育委員会総務課・文化遺産課とも連携しながら、県内市町村担当者・各学校への広報・周知を行い、令和4年度以上の利用促進を図る。また増加する利用にも対応できるようにするために、教育普及担当職員の配置を教育委員会に求めていく。
自己評価	4～5月にかけて県教育委員会・文化遺産課とともに、市町村教育長・社会教育主事・県立学校校長などを対象に常設展の説明会を実施し、博物館の利用促進を進める試みをおこなった。学校による利用状況については、令和4年度と同程度であった（令和元年度42件1300人、令和4年度35件1212人、令和5年度44件1189人）。教育普及担当職員の増員を求めたが、増員には至らなかった。
課題・改善案	周知効果は少なく、学校（担当教員）へ直接働きかけるなどの活動が必要である。そのためにも教育普及担当職員の増員・配属を引き続き求める。学校等団体利用が増加した際の、博物館側での対応ができるような体制づくりもあわせて必要である。

②講演会・博物館講座

(12)講演会・博物館講座の実績、参加者へのアンケート調査

令和5年度目標	感染予防対策にも留意しながら、制限内容を徐々に取り除きつつ、できる限り制約のない形態・頻度(コロナ禍以前の状況)で実施できるように努め、参加者数の増加を図る(AVホールの場合は1回50人程度)。
自己評価	制限のない形態（事前申し込みや定員などを撤廃）で講演会・講座を実施することができた。講演会・講座参加者も春特別展時は少なかったが（30人程度）、秋特別展時には平均80人程度の参加者を得ることができた。
課題・改善案	講演会や博物館講座などの頻度を増やしつつ、内容も多様なものを企画していく。

③展示解説・ワークショップ・見学会・関連行事等

(13)実績の把握、参加者へのアンケート調査

令和5年度目標	制限を可能な限りなくしつつ、コロナ禍以前と同程度・同頻度で展示解説(ミュージアム・トーク)や現地見学会など各種イベントを実施する。
自己評価	現地見学会1回、ミュージアム・トーク(展示解説)30回、ワークショップ(「文化財を触ってみよう」)1回など、様々なイベントを実施し、多くの参加者を得ることができた。またコロナ禍以前の頻度で行うことができた。後半期にはミュージアム・トークの参加者数はコロナ禍前の水準まで戻り、1回平均平均16人程度となった。
課題・改善案	頻度や参加者数はコロナ禍前の状況には戻ったが、入館者数を増やしていくためには、新たな取り組み(イベント)などもさらに考えていく必要がある。

④県民との協業

(14)ボランティア・友の会などの活動実績、観光事業との連携

令和5年度目標	和歌山大学ミュージアムボランティアについては、従前と同じメニューで実施する。着彩などについては、一般のボランティアや友の会の協力を受けるなど、より広く博物館活動に参加できる仕組みを検討する。
自己評価	和歌山大学のミュージアムボランティアは従前通り実施したが、着色ボランティア以外の参加は見られなかった。一般のボランティアや友の会の参加の仕組みは検討できなかった。
課題・改善案	和歌山大学ミュージアムボランティアについては、従前と同じメニューで実施する。一般のボランティアが参加できる仕組みを検討するため、他館(紀伊風土記の丘など)の事例などを研究する必要がある。

⑤人材育成

(15)学芸員実習・インターンシップ・教員研修などの受入実績

令和5年度目標	インターンシップは、コロナ禍以前の水準に戻るよう(年間8校程度)、可能な限りで受け入れる。「けんぱく・こどもゼミ」については、他の教育普及事業のスケジュールも勘案しつつ、冬に実施する(1コース6回開催、10人程度の受け入れる)。
自己評価	インターンシップの受け入れは7校12名となり前年度(4校5名)より増え、概ねコロナ禍前の水準まで戻った。「けんぱく・こどもゼミ」は冬に実施し10名受け入れ、6回の講義を実施した。
課題・改善案	インターンシップは、引き続き年間8校程度の受け入れをする。また「けんぱく・こどもゼミ」も引き続き実施する。

⑥文化財に関する相談への対応

(16)問い合わせ・質問(電話・来館等)への対応実績

令和5年度目標	記録すべき内容を明確化したうえで、台帳を作成し記録する。
自己評価	対応件数は480件で、問い合わせについては丁寧にかつ早急に対応している。2023年度から、レファレンス台帳(Excelによる表)を作成し、いつ、誰が、誰から、どのような内容の質問を受け、どのように対応したのかを記録化した。
課題・改善案	引き続き問い合わせに対しては丁寧に対応する。また台帳への記録については、記録内容にばらつきがあるため、記録事項を明確化する。

5. 広報・情報発信

博物館長による所見	ポスター・チラシの配布は適宜行われているが、HPやSNSも含め、どのくらいの効果があるのか、アンケート調査だけでは見えてこない。メディアへの情報提供も企画展やイベントの紹介・周知だけでなく、多様な話題が提供できるよう情報交換にも努めたい。また小中学生の来館を促す工夫とともに、博物館がどのような学習の場であるのか、学校の授業の中で学芸員がオンラインで参加するなどの機会も考えたい。
評価部会による所見	web（インターネット）やX（ツイッター）などのSNSを活用した広報を積極的におこない、それが一定の成果を得ていることは評価できる。アンケートの内容を分析し、戦略的にwebでの広報を進めること、メディアに取り上げられやすいテーマを考えるなど、これまでの広報方法の見直しを行うことも検討されたい。効果的な広報を進めるためにも、他館の事例を参考にして広報担当の専門職員の配置を検討されたい。新聞やテレビ局などメディアとの協力・連携についても可能性を摸索されたい。

①メディアへの情報発信

(17)取材への対応・掲載の実績

令和5年度目標	効果的なタイミング・回数で資料提供を行う。展覧会の内容や地域にあわせて、対象となる団体に働きかけるなど、資料提供以外の広報手段を検討し、実施する。
自己評価	企画展・イベントなどにあわせて資料提供を7回おこなった。展覧会と関わって、先行チラシの作成と配布など、対象となる地域（有田郡の市町）と連携をおこなって広報を実施した。また展覧会内容と関わるテレビ番組の機会を捉えて、広報活動を行った。
課題・改善案	メディアで取り上げられるよう、効果的なタイミングで資料提供をするなど、時期なども考えたうえで情報提供を行う必要がある。展覧会の内容や地域にあわせて、対象となる団体に働きかけるなど、資料提供以外の別の角度からの広報手段を検討する。

②ホームページの運営

(18)アクセス件数・更新回数、コンテンツ・デザイン等の工夫

令和5年度目標	子ども向けコンテンツの導入や収蔵品検索の項目を設けるなどの検討をし、ホームページに載せる内容の整序・充実を目指す。
自己評価	子ども向けコンテンツの導入およびホームページに載せる内容の整序は行っていない。ただし、夏の子ども向け企画展において、試験的にQRコードを用いた解説を取り入れ、館蔵品紹介（データベース）と連携するなど試験的な取り組みをおこなった。
課題・改善案	現状のホームページを利用しやすくするため、ホームページの問題点の洗い出しを行う。あわせて、親しみやすいコンテンツの開発を進める。

③印刷物の制作

(19)ポスター・チラシ・館だより・カレンダー等の制作実績

令和5年度目標	特別展ごとの入館者目標も念頭に置きながら、印刷枚数や配布枚数を検討する。また、春・秋の特別展以外にもチラシを作成する手段なども検討し、実施する。
自己評価	特別展ごとに印刷枚数を設定して（春特別展ポスター2,200部・チラシ40,000部、秋特別展ポスター2,300部・チラシ50,000部）チラシの作成と配布をおこなった。そのほか特別展以外にも、「けんぱく・こどもゼミ」の募集にあわせて冬の企画展「高野山寺領の村」「新収蔵品展」のチラシを作成し（40,000部印刷）、県内の小学校（5・6年生と教員）・中学校（全生徒と教員）に配布した。
課題・改善案	特別展ごとの入館者目標も念頭に置きながら、印刷・配布枚数の変更を若干おこなったが、残部がでるなど十分ではなかった。引き続き印刷枚数や配布枚数を検討する。また、春・秋の特別展以外にもチラシ・広報物を制作する手段なども検討する。

④さまざまな広報手段

(20)多様な広報手段の検討

令和5年度目標	通常予算の特別展でのチラシ作成以外、企画展などでもチラシを作成できないか検討する。SNS(X(旧ツイッター)・フェイスブック)などを活用した広報を積極的に取り入れ、年間200post(Tweet)、フェイスブックの更新50回を目指す。
自己評価	「けんぱく・こどもゼミ」にあわせてチラシを作成し、冬期間の企画展についてチラシを作成することができた。SNSによる広報は、X(旧ツイッター)は316回、フェイスブックは41回の更新をおこなった。ホームページ年間閲覧件数は109,048件。
課題・改善案	広報の告知内容に応じて、SNS(X・フェイスブックなど)、チラシ、ホームページなど広報手段の検討を進める。

6. 組織と運営

博物館長による所見	学芸員の新規採用が実現し、業務の継承も着実に進められている。今後も歴史分野を専門とする学芸員の増員を図りたい。文化庁等が実施する研修に無理なく参加できるように館内の環境づくりに努め、さらに館内での研修も具体化し、円滑な博物館業務の遂行を目指したい。入館者は所期の目標には届いていないが増加傾向にある。情報公開は着実に実施されている。早急に館独自の防災マニュアル作成を行うべきである。
評価部会による所見	学芸員の数が少ないなか、展示・調査研究・教育普及・保存管理など様々な活動に取り組んでいることは高く評価できる。学芸員の世代交代の時期にさしかかっており、新規学芸員の採用については、博物館の役割を有効に機能させるため、専門分野や年齢、採用時期などについて工夫が必要である。また県庁や文化庁主催の研修のみではなく、博物館のあるべき機能・役割を考えて、他館の事例を研修(視察)する機会を設けて、学芸員のスキルアップを図られたい。ボランティアの活用、地震時における館独自の対応マニュアルは、昨年度以来の課題であり、早急に検討を進めるべきである。

①組織・人員、職員研修

(21)適切な人員配置についての検討、各種研修への参加実績

令和5年度目標	新規学芸員の採用に向けて、時期・専門分野についての検討を行う。学芸員資質向上のため、各学芸員が文化財に関わる国実施の研修に参加できる環境づくりを進める。また円滑に事務継承できるように、館内での研修を行う。
自己評価	学芸員を1名新規採用した(採用試験の実施)。さらなる新規学芸員の採用に向けた検討を行い、教育委員会等と協議・交渉を続けたが、進捗はなかった。文化庁等が実施する研修については1件に参加した。館内独自の研修の実施はできなかった。
課題・改善案	引き続き、学芸員を増員するための協議と取り組みを進める。また、研修等の機会を増やすとともに、研修の機会には必ず応募するように努める。

②利用者数

(22)利用者数の把握・分析

令和5年度目標	入館者数はコロナ前の35,000人をめざす。また、県民が関心のあるテーマ・内容の展覧会を開催することで、県民全体にとって魅力ある、地域に根付いた博物館となるよう努めていく。
自己評価	入館者数は増加したが(29,000人)、目標(35,000人)には達成しなかった。地域に根付いたテーマで展示(特別展2件、企画展5件)を企画し、概ね好評を得た。
課題・改善案	入館者数は、コロナ禍前の35,000人を目指す。地域に根付いた博物館として、県民が関心のあるテーマ・内容の展覧会を開催することで、県民全体にとって魅力ある博物館となるよう努めていく。

③情報公開

(23)使命、目標、計画、評価などの整備・公開

令和5年度目標	「博物館の使命」に基づき、令和4年度の評価をホームページ上に公開するとともに、令和5年度の目標を策定する。
自己評価	令和4年度の博物館評価をホームページに掲載・公開した。令和5年度の目標を設定した。
課題・改善案	下半期に令和5年度評価をホームページ上で公開するとともに、令和6年度目標を策定する。博物館評価の項目の見直しと有効な課題設定を進める。

④危機管理

(24)危機管理・防災体制に館するマニュアル作成、実地訓練等の実施実績

令和5年度目標	地震等の防災訓練を実施する。火災以外の訓練(地震など)もマニュアル化する。
自己評価	防災訓練は例年通り実施した。館独自の地震時に対応するための文化財防災マニュアルは作成できていない。
課題・改善案	令和5年度秋に文化遺産課によって作成された文化財防災マニュアルを踏まえて、博物館独自の文化財防災マニュアルを作成する必要がある。

7. 施設・設備

博物館長による所見	令和8年度までに実施予定の空調機改修にあわせて、関係各所と協議を進め、実施計画を早期に具体化したい。収蔵庫内の環境調査を実施し、収蔵品の安全を第一に、最善の収蔵環境を実現すべきである。多様な入館者を見据えた展示に対応すべく施設の改善に努め、アメニティーの向上に注力すべきであろう。近代美術館とも緊密に連携しつつ、黒川紀章設計の希少なミュージアムとして、館内外の施設整備にも配慮すべきか。
評価部会による所見	外壁の改修やウォーターサーバーの設置など、アメニティーは向上している。また「さわれるレプリカ」事業が、国の補助金ではなく県の予算のなかで進めることができた点は、今後の事業展開を考えてもモデルとなるものとして評価したい。近代美術館とも緊密に連携しつつ、令和7年度に控えたエレベーター工事や空調機改修に向けて、館内外の環境整備に努め、安心・安全な施設づくりを引き続き検討されたい。あわせて、免震設備についての検討も進められたい。

①施設設備の維持管理

(25)日常的な点検・改修保全の実施実績、安全衛生の管理、中長期修繕計画

令和5年度目標	空調機改修にあたり、改修時に収蔵庫内の資料群をどのようにするか、様々な可能性を摸索し、文化庁と協議するためのデータの集積を行い、実施時の方向性を定める。
自己評価	R7～R8年度にかけての空調機改修にむけて計画は進行したが、より安全に改修するために、新規に収蔵庫の温湿度データの採取をし、実施時の方向性を決め、協議をするまでには至らなかった。
課題・改善案	空調機改修に向けた準備、データ採取を進めたうえで、収蔵庫内の資料の取り扱いについて、文化庁や県文化遺産課との協議を進める。

②アメニティーの向上

(26)バリアフリー・ユニバーサルデザイン等への対応

令和5年度目標	「さわれるレプリカ」の作成を継続し、あらゆる人に開かれた博物館展示をする。
自己評価	文化庁補助金の申請はしなかったが、県の予算のなかで「さわれるレプリカ」（「お身代わり」仏像）の作成は継続し、2件3点の「さわれるレプリカ」を作成し、「お身代わり」仏像の奉納も行った。県の予算のなかで実施していくべき事業であり、そのかたちを一つ示すことができた。
課題・改善案	エントランスでのコンテンツ増加には至っておらず、文化財保存とあわせて教育普及としての位置付けも重視し、「さわれるレプリカ」事業を位置付ける。

8. 財源

博物館長による所見	入館料はもとより図録、グッズ販売等のキャッシュレス化を進めるとともに、ネットでの販売方法も検討したい。外部助成金は、積極的に獲得することが望ましいが、そのためには展示計画や研究計画を可能な限り早期に具体化し、申請しやすい状況を整えておくことも必要であろう。科学研究費等の研究成果が、企画展などの展示に反映させることができれば、博物館の展示の充実にも大いに資するであろう。
評価部会による所見	若い世代の人がより利用しやすくするための工夫は、昨年度以来進められておらず、引き続き検討されたい。外部資金については、科学研究費補助金や文化庁補助金などに申請をされており、採用率も高く評価できる。今後は、企業など民間の助成金などの獲得も検討されたい。

①予算の確保

(27)財源の確保、歳入実績

令和5年度目標	若い世代の人がより利用しやすくするため、また歳入をあげるため、図録などが買いやすくなるよう、現金書留や郵便小為替以外による郵送購入方法の検討を進める。
自己評価	若い世代の人がより利用しやすくなるための方法を検討はできていない。現金書留など、郵送購入方法の検討を行うことはできなかった。
課題・改善案	引き続き、歳入を効率的に増加させるために、キャッシュレス化などの検討を進める。

②外部助成金等

(28)外部助成金等の獲得実績

令和5年度目標	文化庁補助金(展覧会関係)・科学研究費補助金などに応募し、その獲得につとめる。
自己評価	文化庁補助金に2件に応募し、1件は不採用、1件は申請中である。科学研究費については1件申請し、1件不採用であった。
課題・改善案	申請はおこなったが採用に至らなかったものもあり、採用されるような内容の申請となるように努力する。